

平成25年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学科5年 E.R (Male)

「実習の概要」

今回私は2013年8月12日より1週間、Harvard School of Public HealthのScott Evans博士が主催する夏季集中講義“Principle of Clinical Trials”を受講してきた。この集中講義は3週間の講義であったが、マッチング試験の日程と一部かぶっていたこともあり、最終週のみ受講した。以下に実習で学んだことをまとめる。

「実習内容」

8/12はsubgroup analysisについての講義を受講した。まずはsubgroup analysisはpre-specifiedとpost-hocの2種類に大別されることから始まり、subgroup analysisにおいて重要な交互作用には、質的交互作用と量的交互作用があることについての説明があった。またsubgroup analysisとstratified analysisとの違いについての解説もあった。これらは、日頃の解析の際には常に注意を払っていることであったので、よく理解できた。

8/13はpredicted intervalsとadaptive designについての説明があった。predicted intervalsについての説明は、内容がかなり難しい上に、私の統計知識の不足と英語力が加わり、ほとんど理解することが出来なかった。adaptive designについては、今年の夏のadaptive designに関するshort courseを受講して、統計ソフトウェアのEastを用いて実際にsample sizeの計算、検出力と有意水準のシミュレーションをしたことがあったので、内容を理解することができた。

8/14はbenefit: riskについての説明があった。今まで体系的に話を聞いたことが無く、とても新鮮なテーマであった。一例としてあげられていた例では、回帰モデルを用いてbenefitとriskを評価する、といったものであった。とてもsimpleな一方で今まで考えたこともない内容であったので興味深かった。しかしながら、与えた回帰係数が正しいのか、といった問題もあるし、benefit: riskを考える際には、集団としてのbenefit: riskと個々人のbenefit: riskを同時に考慮する必要がある、実際の臨床試験においてこの手法を用いることは、まだ現実的ではないな、と感じた。

8/15はreporting of clinical trialsについての説明があった。randomized trailにおけるCONSORT、non-randomized trailにおけるTREND、diagnostic studyにおけるSTARD、cohort studyにおけるSTROBEなどのcheck listの紹介が、一番参考になった。実際に現在私は論文を書いているので、紹介して頂いたcheck listを参考にしている。

8/16,17 は本講義を受講していた MD による、講義内容を参考に実際に自分がデザインした臨床試験についての presentation があり、発表ごとに discussion が行われた。発表されたほとんどの design はかなり複雑なもので、実際にそのような臨床試験を難しいのでは、と感じる部分もあったが、inclusion criteria, exclusion criteria, エンドポイントの設定など、非常に勉強になった。

[その他]

8/18,19 はボストン観光をした。また 8/19 には博士課程の高校の先輩と夕食をとり、意見交換をした。

「今後の抱負」

今回の講義を受講して、臨床試験のデザインと解析に関する基礎的な知識と実践的な技術を取得することができたと思う。しかし今回の講義を受講して痛感した事は、語学の問題である。臨床試験や統計に関する英語はだいたい理解することができたのだが、食事の際の日常会話ではしばしば周りの会話を理解できないこともしばしばあった。今回得た知識を今後の解析に活かすと同時に、英語の勉強にも努めようと思う。